

木村 汐凧ちゃん(きむら・ゆうな/当時7歳)、深雪さん(みゆき/当時37歳)、王太朗さん(当時77歳)

福島県大熊町



地震後、近所の児童館にいた汐凧ちゃんを、祖父・王太朗さんと母・深雪さんがそれぞれ迎えに行きましたが、3人は避難の途中で津波に巻き込まれたとみられています。汐凧ちゃんは行方がわかっていませんでしたが、2016年12月、大熊町内の海岸で汐凧ちゃんが身につけていたマフラーと骨の一部が見つかり、

DNA 鑑定で汐凧ちゃんのものと同様と確認されました。

汐凧ちゃんの父親の木村 紀夫さん(48)より (2014年6月記)

『汐凧へ』

汐凧。あの震災から、もう3年が過ぎてしまったけど、お父さんはまだ、汐凧が津波の犠牲になったということが実感できないでいる。現実であることは、理解できているのだけれど、それはまるで突然お父さんの前からいなくなっただけで、汐凧はどこかで元気になっているような…。

「汐凧ちゃんは、南の島で元気に走り回っている」と、未だに信じている友達もいるよ。



お父さんは、汐凧に謝らなければならないことがある。大きな地震があったら津波が来るから家に戻っちゃいけないと、しっかり教えてなかったことをとても後悔しているんだ。

汐凧ならきっと、ちゃんと教えてればその通りにしっかり行動できたはずだ。ほんとうに、申し訳なかった。

そしてまた、安全な児童館にいた汐凧が、どうして爺ちゃんの車に乗って家に戻らなければならなくなったのか、それが不思議でならないよ。だって爺ちゃんはお姉ちゃんを学校に残していったのに、なぜ汐凧だけ連れて行ってしまったのだろう。

今となっては、考えても仕方がないことだけれど、でもそれは汐凧がお父さんたちに残してくれた教訓だと思うし、伝えていかなければならないことだと思うんだ。

そうだね、汐風はお父さんに生きてやらなければならないことを残してくれた。地震が来たら海の近くにお家のある子供を、親が迎えに来たからといっても帰してはならないし、親も決して家に連れ戻ってはならないということ。また、親は、子供が自らの判断で危険を回避しなければならないことを教えなければならない。

いつ何時でも、必ず親が子供を守ってやれる状況にあるわけではないのだから…。

大熊町の行方不明者は1人になったよ。汐風だけだ。その「1」という数字も、汐風が残してくれたもので、その意味についてはずっと考えていかなければならないことだと思っている。汐風をしっかりと捜してやれない原因をつくった原発事故は、お父さんたちが求めてきたお金を使って消費して得る楽な生活、その代償のような気がするんだ。だからその「1」という数字は、人の生き方を問い直す為の大きな数字だと思う。

汐風のおかげでたくさんの心ある人たちに会ったよ。未だに警察や消防、ボランティアの方々が、放射能を浴びる危険を冒してまで汐風を捜しに大熊に入ってくれている。お父さんの生活を支えようと集まって来る人達もいる。それは、汐風がお父さんに与えてくれた宝物だね。本当に、ありがとう！

お父さんは今、お姉ちゃんと一緒に長野の白馬村で新しい生活を始めている。ただね、ここに汐風がないのが淋しいよ。お母さんも恋しいし、お爺ちゃんにも会いたい。また、6人で生きていけたらいいね…。

汐風は相変わらずお母さんたちを笑わせながら、飛び回っているのかな…。俺もいつかそこに加わらせてほしいな。

それまでは、ここでの生き方、汐風を捜すこと、伝えること、そうすることでずっと汐風と繋がっていけると信じて生きていくよ。

大丈夫、お父さんたちもずっと一緒に居るから…。



※2006年5月に日立市の「かみね公園」に旅行した際の深雪さんと汐風ちゃん。深雪さんは、お菓子作りが得意な明るなお母さんでした。

※震災後、3人の行方を捜すために木村紀夫さんが作成したチラシ。避難所やお店などに配って歩いたといひます。